

第二次世界大戦終戦直後、
バンコク近郊に日本人収容所が開かれた。
敗戦国民となった邦人が、
そこで経験した生活とは。

バンブアトーン



日本人収容所

服部一人「文」

取材協力
バンブアトーン学校教諭
カンチャイ氏
タイ国日本人会

第二次世界大戦開戦直後の1941年12月、南進する日本軍はタイ進駐を計り、日タイ同盟条約を結んだ。これによってタイも連合国側に宣戦布告する。タイ政府はそれまで自国が戦場になる危険がある他国軍の駐留を嫌い、中立の立場を取っていたが、一転して同盟を結ぶ決定となった。もはや日本軍進駐が強行されるのはまぢがいない、これを拒否すれば日本と交戦することになる。タイの戦力では勝ち目がなく、タイに選択の余地はなかった。

また開戦当初、日本軍が各地で快速撃を続けていたことから、タイの要人の中にも、もし日本が戦勝国になった場合に、タイも何らかの分け前にあずかるためには、手を結んでおくのが得策であるという意見もあったという。

日本軍が進駐してからは、求めに応じて膨大な額の戦費を支出し、対日協力を進める一方で、つねに戦局の大勢をうかがい「自由タイ運動」という名の抗日地下組織にひそかに援助を続け、そこから英米にも密通していた。事の次第によっては、いつでも寝返る準備をしていたのである。

そして終戦。タイはただちに英米に対する宣戦布告は無効であったことを宣言し、日タイ同盟条約の一方的な破棄を通告した。これら一連の行動はタイの本意ではなく、強制されたものであるという説明であった。連合国側はタイのこの決定を、おおむね寛大な態度で受け入れたので、敗戦国となった日本と同盟を結んでいたにもかかわらず、タイはその責を免れ、戦勝国側に立つことができたのだ。

まことに鮮やかな転身であるが、日本にとっては裏切りである。しかしタイにしてみれば、当時周辺国が植民地化されるなか、大国とはいえないタイが独立を守るための巧みな外交と、言うことができるだろう。当時のクアン・アパイウォン総理が当時を回顧した次の言葉が象徴的である。

「国の外交とはまったく複雑多岐である。我々は白を欲しながら、あたかも黒を欲しているように振舞い、終局において白を獲得することに成功した」。

住めば都の収容所

タイにいた日本人は敗戦にともない収容所に入れられることになった。現在、在タイ邦人は4万人を越えるが、すでに戦前から邦人社会が形成さ



収容所の風景。当時このあたりの陸上は道路が不十分で水上交通に頼っていた



食料は豊富にあった



収容所に作られた幼稚園



5月の鯉のぼり



青空教室



教室の前で



成人教室



バレーボール大会



れており、終戦時には民間人だけで3500人ほどの日本人がいた。彼らはバンコクから北へ約40キロの、ノンタブリー県バーンブアトーンに作られた収容所に抑留されることになった。バーンブアトーンはチャオプラヤー川とつながる運河沿いの土地で、現在でこそバンコクのベッドタウンとして開発が進んでいるが、当時は湿地帯と水田が広がる何もない田舎であった。日本人はバンコクの現在オリエンタルホテルのあるあたりから船に乗せられ、ここに連れて来られたそうだ。

1945年10月に収容所が開かれ、第1〜3に別れたキャンプの、1、2には民間人、3には大使館官庁関係者などが収容された。日本人たちは連れて来られた当初は雨季の最中で、水浸しになった現地であんなに暑持ちになったというが、乾季になり次第に現地に慣れるにつれ、収容所での生活を楽しむようになったという。

と生活し、余暇を楽しむ工夫を始めた。でこぼこした田んぼのあちこちにわか仕立ての野球場やバレーボールコート、相撲の土俵ができて皆でスポーツを楽しんだ。また演芸舞台も作られ、後に女優となる浅岡ルリ子も役として大いに沸かせたという。「演芸会では、現在何かと話題を集めている女優、浅岡ルリ子は当時4歳位、演芸会でやっこさんを踊り喝采を浴びた。梅檀は双葉より芳しいうところであろうか」。(元日本人会会長 大峽一男 日本人会会報「クルンテープ」誌より。以降の引用も同誌より)

カルチャーセンターのようなものも盛んで、お互いが先生や生徒になって、タイ語や中国語、農業や仏教講座、手芸、短歌、俳句、茶道、書道、彫刻、絵画、歌、演芸、碁、将棋グループなどが誕生し、収容所は大いに活気に満ちた。やがて寺子屋式の日本人学校や幼稚園、小さな病棟なども設けられた。以下は実際に当時を体験した人々の言葉である。

であった。食住共に向こう様持ちで毎日自由を楽しんでいたと云う事になる。演芸会、講習会、相撲、野球、と任意に希望を充たしてくれ、若者はバンブアトーン河にもぐりしじみ貝を捕らえて味噌汁を作っていたのであった。

(瀧川虎若 元瀧川医院医師)

「バーンブアトーンの抑留所生活も懐かしい。食事が無料で、使役、電話借金取りのない生活で、日がな一日麻雀に打ち興じる人もあれば、多くの劇団も生まれ、バーンブアトーン大学と称し、多くの自称学者が種々雑多な講義をし、私もタイ語の講義をさせてもらったが、卒業証書を作って授与式までした先生もあった」。(富田竹二郎 元大阪外国語大学タイ語課主任教授)

なんだか皆で楽しんでる姿が目に見え、浮かぶようである。当時の写真を見ても、人の表情からほのぼのとした雰囲気や伝わってくる。およそ敗戦国民の収容所の生活とは思えない。

キャンプの歌

当時第2キャンプにいた白石氏と古川氏、田中氏が創った「キャンプの歌」というのがあり、収容所の日本人の間



撮影：服部一人

上：当初、雨水や川水を使用していたが、水質がよくないので皆で井戸を建設することになった
下：当時を物語る井戸の遺構



撮影・服部一人

キャンプの歌 白石 巖 作詞 田中 運夫作曲

軽快に

レングはちやく ぼとけく にが めんまっ ぼとけ
 バン プトン をけが ぼらに ニッ ぼく やめち
 ゃめば せや ニッ ぼら んら んら んら んら
 んら んら んら んら んら んら んら んら

- 運送を早く 私の國の
メナムの住り パンブ
竹の住り ニッパの國も
住れば國も 日本は
みんな元気で みんな元
行こうじゃないか
- 村を渡る 小川の氷も
割れやまい アナムだ
まゝもきき 力をあはせ
暮らせば暮 暮ららぬ
みんな元気で みんな元
行こうじゃないか
- 國に集した 運送のこと
然にかかれど 奇しし
心はがらに アヒルを飼
持せば運送の 船も来る
みんな元気で みんな元
行こうじゃないか

右上：キャンプの歌。のどかで楽しい歌詞が並ぶ
 左上：日本人が架けた友好橋
 左下：かつて友好橋があった場所

で大いに歌われていたらしい。

「國に残した家族のことが 気にはかかれど今しばし 心ほがらにアヒルを飼つて 待てば迎える船も来る みんな元気で みんな元気で 行こうじゃないか」

なんともお気楽な歌詞で脱力してしまいが、本当にこの歌詞のとおり暮らしていたのだろうか。收容所という言葉のイメージから連想される暗さはどこからも感じられない。

ほほえましい話はほかにもある。收容所の日本側代表を務めた森広三郎氏の秘書兼通訳としてタイ側と折衝にあたった前述の富田竹二郎氏は、当時を回想して次のように語っている。

「タイ側の）司令官が日本人の慣習を認めると言ってくれたので、いろんな要求をした。『日本人は麻雀をし、正月には酒を飲み、餅をついて食べ、毎週スキヤキを食う慣習がある』などで、これらはすべて容認され、タイの国費を以つて賄われた。3000人の邦人が帰国するときにも大量の米や果物が贈られた。なんと、心やさしき人々だろう！」。

ダメもとで言ってみる方もあつたけれど、それを許したタイ側もなんと

おおらかでやさしいことである。

周辺のタイ住民も收容所を受け入れ、いさかしく共存していたようである。バンブアトーンにあるラハーン寺には、收容所内で不幸が起こった時の通夜や葬式などで、日本人たちはお世話になっていた。そのお礼として寺の前の老朽化した橋を改修することになった。その木橋は「友好橋」と名付けられ、現在はなくなっているものの、長くバンブアトーンの地元住民に使われていた。

バンブアトーンとは「金の蓮の村」という意味だ。心やさしくおだやかなタイ人に囲まれて、ここでの暮らしは敗戦で傷ついた日本人にとつて忘れがたい良き思い出となったようである。しかし1946年6月に日本への帰国事業が始まり、10月にはすべての日本人がここを出て收容所は閉鎖されてしまう。楽園での生活はわずか1年あまりのことだったのだ。收容所閉鎖に際し、600人以上の日本人がタイ残留を希望したという。戦前からタイに根をおろし、仕事をしてきた人が多かったとはいえ、いかに当時の日本人にとつてタイが居心地の良い国に感じられたかがわかる。■